

古代末から中世の製鉄遺跡・宍粟市安積山遺跡の研究に向けて

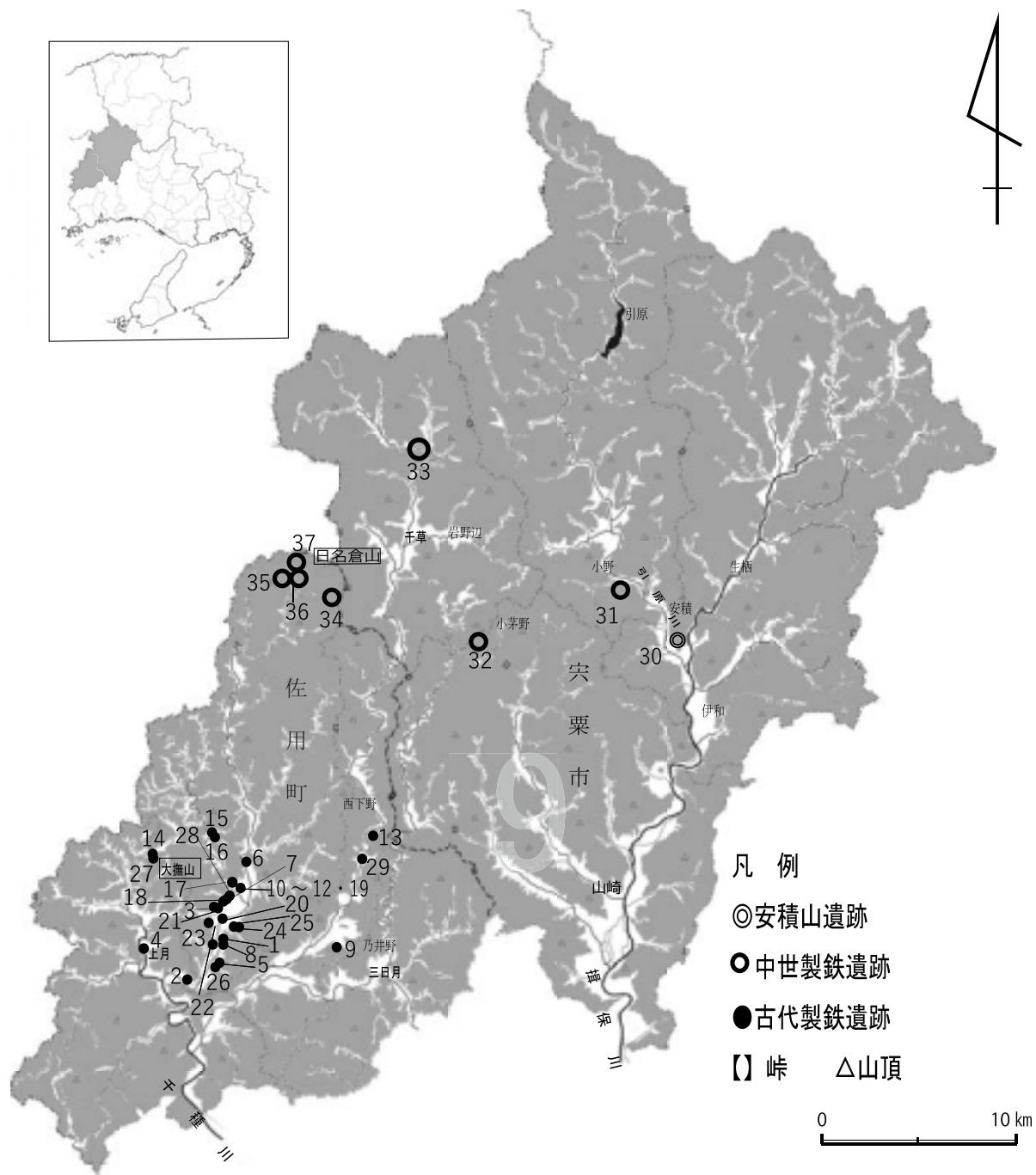
村上泰樹・田路正幸

はじめに

ひょうご歴史研究室たたら製鉄研究班は、古代から近代にかけて播磨北西部の宍粟市・佐用町域で発展した鉄生産を対象に、文献史学・考古学の両面から研究活動を進めている。研究の成果については「ひょうご歴史研究室紀要」で随時発表してきた^{①②}。研究をより深化させる必要から、新たな史料の発掘や過去に調査された考古資料の掘り起こしと情報の発信といった基礎的研究にも取り組んでいる。

文献史学の分野では、新たに発見された近世鉄山関係史料「鉄山一件」・「鉄山御請負御用留」に「千草屋手控帳」を加えた翻刻集を本年度出版す

ることができた。考古学の分野においても、過去の発掘資料の情報発信に向けて、古代末の製鉄遺跡として知られている宍粟市安積山遺跡の発掘調査の資料調査を実施している。安積山遺跡は確認調査を含めると、平成五年（一九九三）から平成二〇年（二〇〇八）にかけて五回（平成五年・六年・一八年・一九年・二〇年）八カ所の調査が実施され、うち六カ所の調査区で古代末の製鉄関連遺構が検出されている。このうち、平成六年に実施された調査についてはすでに成果の一部が公表^③され、播磨地方を代表する古代から中世への過渡期の製鉄遺跡として重要な遺跡との評価を得ている。しかしそれ以後の調査成果については、未発表の状況である。たたら製鉄研究班では安積山遺跡の全容を明らかにするため宍粟市教育委員会の



1 山平B遺跡	奈良時代（8世紀後半）	11 本位田魚ヶ鼻遺跡(B区)	未詳	21 福地製鉄遺跡	奈良・平安時代	31 小野段林遺跡	中世
2 坂遺跡	奈良時代（8世紀中）	12 本位田高田遺跡	古代？	22 たたん谷製鉄遺跡	奈良・平安時代	32 小茅野後山遺跡	13～15世紀
3 永谷C遺跡	奈良時代（8世紀後半）	13 西下野製鉄遺跡	奈良時代初頭（8世紀初）	23 かんだに製鉄遺跡	奈良・平安時代	33 高保木製鉄跡遺跡	中世
4 金屋中土井遺跡	平安時代	14 木戸口製鉄A遺跡	奈良・平安時代	24 佐用坂製鉄遺跡	奈良・平安時代	34 滝谷U遺跡	中世
5 カジ屋遺跡	奈良時代？	15 仁方神庭神社製鉄遺跡	奈良・平安時代	25 上町製鉄遺跡	奈良・平安時代	35 たたら製鉄遺跡	中世
6 横坂丘陵遺跡	奈良時代頃と推定	16 仁方安井製鉄遺跡	奈良・平安時代	26 大坪製鉄遺跡	奈良・平安時代	36 丸山製鉄遺跡	中世
7 永谷B遺跡	奈良時代（8世紀中頃）	17 池の堤製鉄遺跡	奈良・平安時代	27 木戸口製鉄B遺跡	奈良・平安時代	37 日名倉製鉄遺跡	中世
8 山平A製鉄遺跡	奈良～平安時代	18 長尾岡の平製鉄A遺跡	奈良・平安時代	28 長尾岡の平製鉄B遺跡	奈良・平安時代		
9 東徳久遺跡	7世紀後半？	19 長尾森谷製鉄遺跡	奈良・平安時代	29 漆野段製鉄A遺跡	奈良・平安時代		
10 本位田権現谷B遺跡	古代？	20 山王タラ製鉄遺跡	奈良・平安時代	30 安積山遺跡	平安時代末		

図1 播磨北西部古代～中世の製鉄遺跡分布図



図2 安積山遺跡の位置（宍粟市基盤地図1/5000をもとに作成）

協力を得て、令和元年（二〇一九）に第一回目の資料調査を実施した^④。今回の調査は発掘調査の記録図面等を対象に実施し、安積山遺跡の製鉄炉の構造と配置などの情報を得ることができた。

本稿では、この調査結果の概要を紹介するとともに、今後の研究の方向性を探る。

二 各調査区の調査概要

安積山遺跡は、宍粟市北部の揖保川と引原川が合流する一宮町安積字丸山ほかに所在し、合流地点の北西側の標高五五メートルの古城山南麓部分に該当する。その先端部分は標高二五〇メートル前後の二つの尾根（東尾根Ⅱ金山、西尾根Ⅱ丸山）が南方向に延び、その間には緩やかな傾斜をもつ谷部が形成されている。遺跡はこの谷部の東西斜面および谷部中央付近に広がっている。遺跡の南東約一キロメートルの地点には、一宮町の三方谷を流れる揖保川と波賀町の引原川の合流地点があり、西播磨を北上し但馬方面と因幡方面に分岐する交通の要衝である。

安積山遺跡は、土器や鉄滓が採集されることから、すでに遺跡として周知されていた。古代末から中世の製鉄関連遺跡として認識されたのは、平成五年度に実施された確認調査においてである。確認調査によって谷部の中央部二カ所（H一八一区、同Ⅲ区）、東斜面部二カ所（H二〇〇・北区、南区）、西斜面部二カ所（H六調査区、H一九・V区）で製鉄炉下部構造などの遺構が存在することが明らかになった。その後、平成六年度（H六調査区）、平成一八年度（H一八・I区、同Ⅲ区）、H一九年度（H一九・V区）、H二〇年度（H二〇・北区・南区）において本発掘調査が実施された。

以下、各調査区ごとにその概要を紹介する。

H六調査区（図四）

標高二一・二二・二九メートルの斜面地を削平および盛土によって三段の平坦面を造成している。調査区の土層堆積状況から平坦面は下段（Ⅲ区）、中段（Ⅱ区）、上段（I区）の順で造られており、とくにⅡ区は地山削平後約一メートルの厚さの整地層が確認されている。これらの平坦面上に一二

基の製鉄炉下部構造が検出された。なかでも主流を占める炉下部構造の形態は、等高線に平行して細長い炉構造をもち、両端に等高線に直交する排滓溝をもつ「コ」の字形を呈するタイプである。長さ五・三〜七メートル、幅一・二〜二メートル、深さ〇・三〜〇・四メートルの大きさである。Ⅲ区で三基（Ⅲ一・二・五）、Ⅱ区で一基（Ⅱ一）、Ⅰ区で二基（Ⅰ一・七・八）と各平坦面に共通して築かれている。最上段の平坦面（I区）では長さ三・〇〜三・四メートル、幅一・二〜一・五メートルの楕円形ないしは隅丸長方形の炉下部構造をもつタイプが出現する。さらに上層には、粘土塊が混ざった土を盛った二×三メートルのマウンドの中央に〇・八五×〇・三メートルの長方形の炉下部構造をもつタイプの製鉄炉が認められた。盛土の下部は、深さ〇・二五メートルの掘形を持っている。炉を挟むように石組がみられ、鞆を設置した施設と考えられている。

遺物はⅢ一・五、Ⅱ一、Ⅰ一・五の炉上面および周辺より平安時代末（一二世紀後半）に比定される東播系須恵器碗が出土している。いずれも

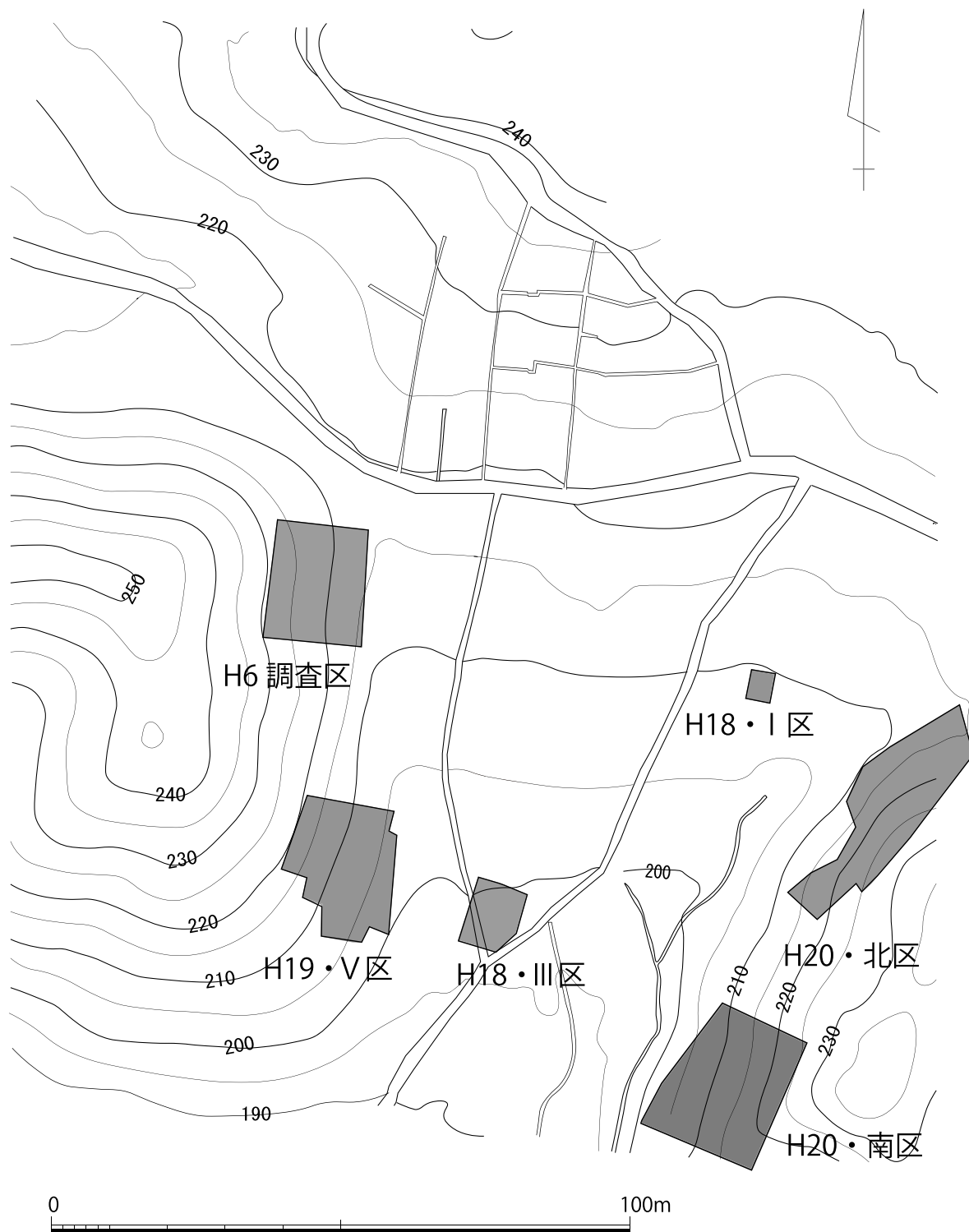


图3 安積山遺跡調査区位置图 (宍粟市教育委員会提供)

「コ」字形の炉下部構造周辺から出土しており、このタイプの播磨における出現期を示唆する資料である。

H一八・I区

谷部中央に設定した調査区で、製鉄炉下部構造一基、排滓土坑、柱穴が検出されている。炉下部構造は、なだらかに傾斜する平坦面上に等高線に平行して築かれ、全長二メートル、幅〇・七メートルの楕円形の平面をもつ。

H一八・Ⅲ区

谷部の開口部付近に位置する。製鉄炉下部構造二基、排滓土坑、柱穴が検出された。炉下部構造は調査区中央の平坦面上に近接して炉一・二が検出された。炉一は等高線に平行に、炉二は直交するかたちで築かれている。炉一は長さ一・八メートル、幅〇・五〇・六メートル、炉二は長さ二メートル、幅〇・五〇・六メートルの規模でいずれも楕円形を呈している。

H一九・V区 (図四)

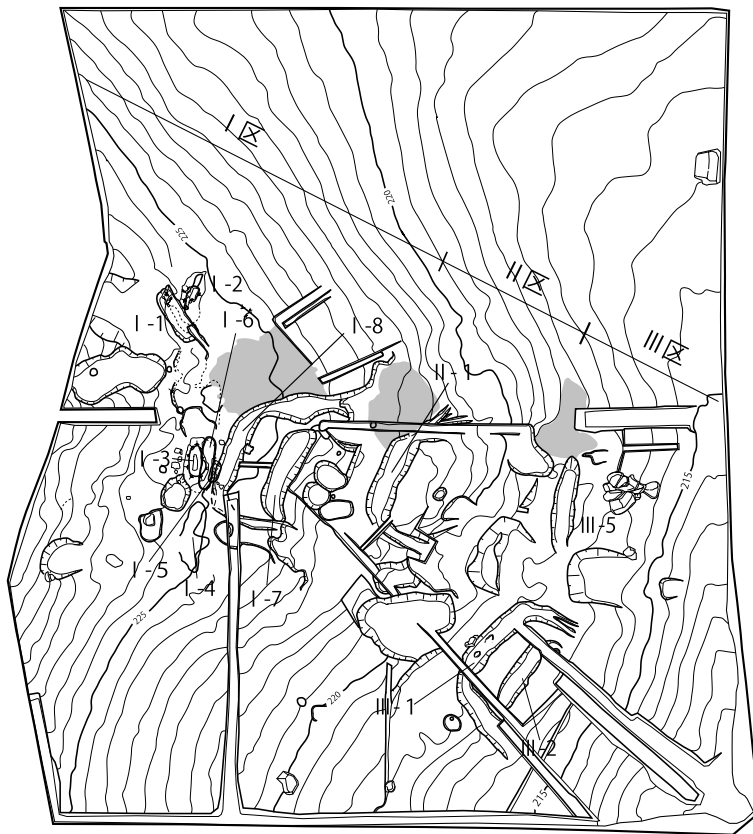
調査区はH六調査区と同様、谷部西側斜面部に位置する。H六調査区の南側、谷部開口部付近に

該当する。西から東向きの斜面に上下二段の平坦面が築かれ、上段で二基(炉一・二)、下段で二基(炉三・四)の計四基の製鉄炉下部構造が検出された。いずれも等高線に平行して築かれている。上段南側の炉一は全長四・二メートル、幅一・三メートル、深さ〇・三メートルと大型の炉である。北側の炉二は長さ二・四メートル、幅一・〇五メートル、深さ〇・三メートルである。下段南側の炉三は長さ二・七メートル、幅〇・九メートル、深さ〇・三メートル、北側の炉四は残存する長さが一・三メートル、幅〇・九メートル、深さ〇・二メートルである。とくに炉一は「コ」字形の炉下部構造をもつタイプを除き、平面が楕円形もしくは隅丸長方形を呈するタイプでは安積山遺跡で最大の規模をもち、数次の操業の痕跡も認められる。

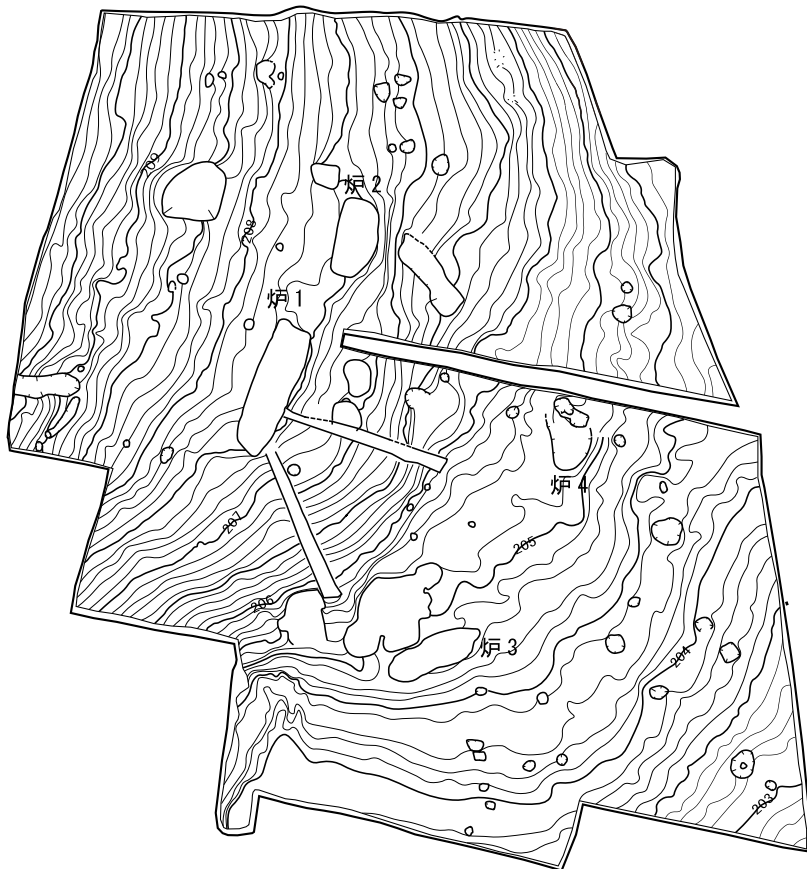
また炉一の周辺から平安時代末〜鎌倉時代に比定される須恵器碗などが出土している点から、H六調査区より新しい様相を示すと考えられる。

H二〇・北区

谷部東側の斜面裾部付近に位置する。調査区北



H6 調査区



H19・V区

図4 H6調査区 H19・V区遺構配置図 (宍粟市教育委員会提供)

側の緩斜面地には、等高線に平行して築かれた製鉄炉下部構造二基（炉一・二）、さらにこれらの南側、調査区中央付近には作業場と考えられる七×七メートルの大きな平坦面が造成されている。平坦面上には複数の柱穴が検出されており、上屋構造をもつ作業場の可能性をもつ。また炉一の西側斜面には大量の鉄滓・炉壁片が廃棄されていた。製鉄炉下部構造は、炉一が長さ一メートル、幅〇・五〇・六メートル、炉二は長さ二メートル、幅〇・五〇・六メートルと安積山遺跡でも比較的小型の炉が集中している。

H二〇・南区

北調査区の南側、谷の開口部付近に該当する。調査区の中央付近を半月状に削平して造成した平坦面上で、製鉄炉下部構造が一基検出された。全長四メートル、幅一・五メートルと大型の炉である。

三 今後の研究の視点

平成六年から二〇年にかけて、六地区の調査が継

続的におこなわれ、谷部および両側の尾根斜面に二二基の製鉄炉が確認された。

操業年代については、出土遺物の年代から一二世紀後半～一三世紀の時期が想定されており、その間二二基の製鉄炉が稼働していたことになる。

安積山遺跡H六調査区の製鉄炉については、角田徳幸氏の製鉄炉下部構造（本床状遺構）の分類とその展開についての研究がある⁵⁾。H六調査区の製鉄炉は、下段平坦面（Ⅲ区）から中段平坦面（Ⅱ区）、そして上段平坦面（Ⅰ区）の順で操業された点を考慮し、角田分類に従い製鉄炉を整理すると、以下のとおりである。（図五）。

第一段階…A1—b型 炉下部構造の両端に排水溝が接続し、平面形が「コ」字形を呈するタイプ。全長五・三～七メートルと大型である。Ⅰ—七・八、Ⅱ—1、Ⅲ—1・2・5が該当する。

第二段階…A2—a型 平面が楕円形ないしは隅丸方形を呈する炉下部構造をもつタイプで、長さ／幅の比が概ね三以上のもので、全長三メートルを超える大型のものが多い。全長三メートル前後のものはⅠ—1・2、4～6が該当する。

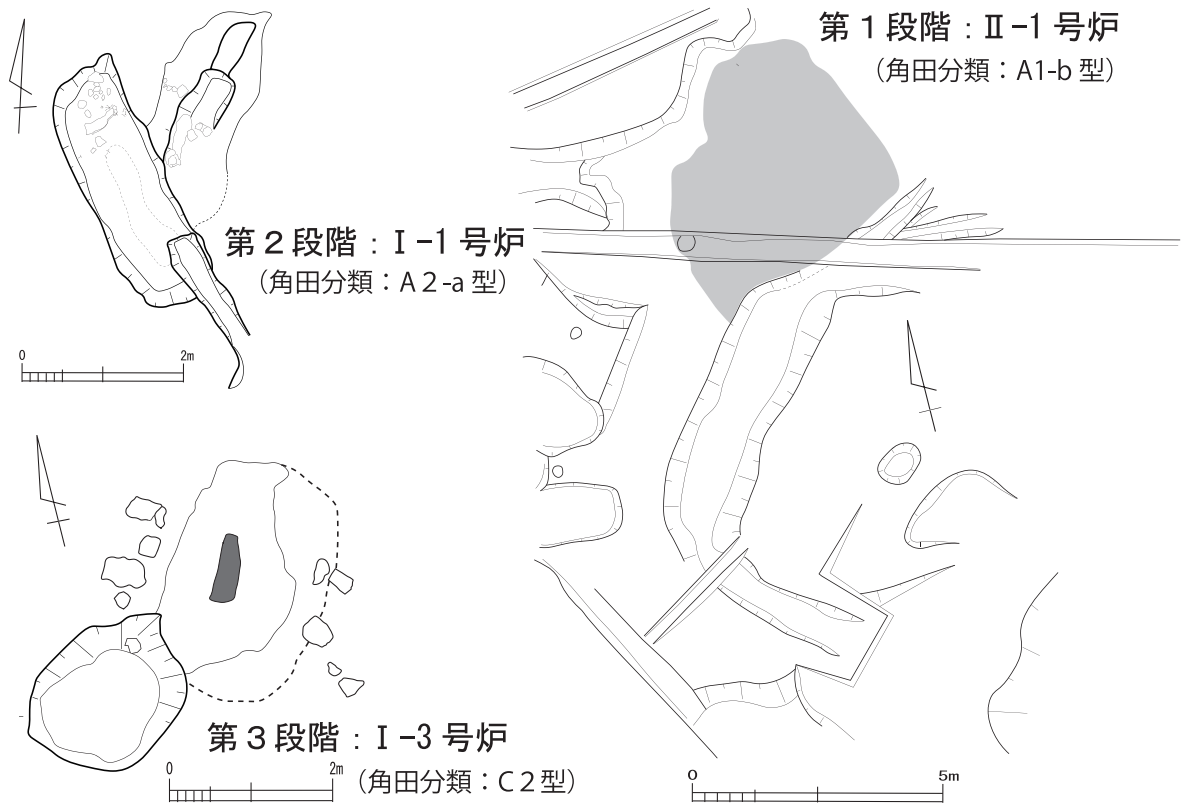


図5 H6調査区の製鉄炉下部構造 (宍粟市教育委員会提供)

第三段階…C2型 地山を掘りくぼめたなかに盛土したマウンドの中央に長方形の炉下部構造をもつタイプでⅠ―3が該当する。H6調査区の中で最も新しい段階の製鉄炉である。

安積山遺跡第一段階のA1―b型は、H6調査区のみで確認された型式で、それ以外の調査区では確認されていない。第二段階のA2―a型は、H一八・Ⅰ区、Ⅲ区、H一九・Ⅴ区、H二〇・北区・南区で共通してみられる炉下部構造で、安積山遺跡の主流になる型式である。しかしH一八―Ⅲ区炉二、およびH二〇・北区の炉二は長さ二メートル、幅〇・五メートルで長さとの幅の比が四・〇と角田分類のA2型の基準値を超え、A1型の範疇におさまる一群がある。今後の調査で注視していきたい。

第三段階のC型(角田分類)は、中世播磨地域で独自に発展した製鉄炉と評価され土佐雅彦氏によって「播磨型」と命名された製鉄炉である。

炉壁転用材を含む粘土ブロックで炉下部構造を囲む構造で、炉下部構造下および周囲に掘り込みをもたないものをC1型、もつものをC2型に分

類されている。H六調査区で検出されたI―3炉は特殊炉として報告されているが、その構造からC2型に分類される。このタイプのものは市域北西部の中世段階に比定される千種町高保木製鉄遺跡(33)や穴栗市に隣接する佐用町の滝谷U遺跡(34)がある。また下部に掘り込みをもたないC1型は、安積山遺跡の北西方、引原川沿いにある波賀町小野段林遺跡(31)、市域中央部の山崎町小茅野後山遺跡(32)で確認されている。安積山遺跡の最終段階で播磨独自の製鉄炉が確認されたことは、この型式の製鉄炉の発生を探るうえで貴重な資料といえる。

次に安積山遺跡と他地域との関係について言及すると、第一段階の平面が「コ」字状のA1―b型の分布は、島根県雲南市大志戸II遺跡二号炉(一二世紀後半)、同奥出雲町梅木原向田遺跡1号炉(一四世紀中頃)・鎗免大池遺跡(一六世紀)と出雲地域で展開する製鉄炉である。ただこの型式の炉のなかで安積山遺跡のものは、今のところ一二世紀後半と最古の事例となる。他地域のもものは長さ四・五メートル、幅1メートル前後の

大きさであるのに対し、安積山遺跡のそれは全長五メートルと大型である点が異なっている。

A2―a型もやはり出雲地域・備中地域に分布しており、その出現は一二世紀以降とされている。

安積山遺跡の操業年代については、出土土器の詳細な検討を経ていないが、一二世紀後半―一三世紀という現時点の認識に立てば、第一・第二段階の製鉄炉の型式は、出雲地域等に比べ古い可能性をもつものである。

古代末―中世にかけての播磨北西部の鉄生産は、出雲地域を中心とした中国地方と密接な関わりをもつて成立した可能性を持つ点を考慮しながら、安積山遺跡の調査・研究を通して播磨の鉄生産の成立と展開を考えていく必要がある。

おわりに

以上、製鉄炉下部構造の視点から、現状の研究成果を踏まえ今後の研究に際しての留意すべき視点を考えてみた。今後、個々の製鉄遺構資料の精査、鉄滓・炉壁を含む出土遺物の調査、文献史料

からの検討、研究成果の情報発信など課題は多いが、研究メンバーと検討を重ねながら調査を進めていきたい。

安積山遺跡の資料調査ならびに未発表資料の提供にあたっては、宍粟市教育委員会の協力を得ることができた。とくに記して感謝申し上げる。

註

- (1) 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編『ひょうご歴史研究室紀要』第三号 特集 はりまのたたら製鉄 二〇一八年。
- (2) 大村拓生「千草鉄の流通と刀剣」・土佐雅彦「たたら製鉄から近代製鉄へ」(『ひょうご歴史研究室紀要』第四号 二〇一九年)。
- (3) 一宮町教育委員会・宍粟郡広域行政事務組合編『安積山遺跡』一宮町文化財調査報告九 宍粟郡一宮町教育委員会 一九九六年。
- (4) 安積山遺跡の資料調査は、たたら製鉄研究班の村上、田路、藤田淳、土佐雅彦、ひょうご歴史研究室コーディネーターの坂江渉をはじめ、安積山遺跡の調査を担当された垣内章氏の参加を得て、令和元年九月一日に行った。
- (5) 角田徳幸「第二章 中世の鉄生産と近世たたら吹製鉄の成立」(『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂

二〇一四年) 三三〜六九頁。

また大道和人氏も近畿地域の製鉄炉の分類のなかで、角田氏の分類基準を援用し、角田分類A1|b型を近畿10型、A2|a型を近畿11型、C2型を近畿13型に分類している。大道和人「近畿地方の製鉄遺跡に関する研究序説」(『淡海文化財論叢』第八輯 淡海文化財論叢刊行会 二〇一六年) 八三〜八八頁。

(6) 土佐雅彦「播磨の鉄」(『風土記の考古学』第2巻 同成社、一九九四年)。

(付記) 本稿は田路の助言を受け村上が執筆・作図し、その後田路が補筆した。